

## 陽明文庫蔵「近衛基熙消息」の翻刻と解題

川崎佐知子

### 〔解題〕

五撰家筆頭近衛閑白家の典籍資料類を保管する財団法人陽明文庫には、近衛基熙の自筆消息およそ七百通が伝わる。そのなかから、文学関係の書物名を明記する消息三十一通を選び、翻刻紹介する。

近衛基熙（一六四八—一七二二）は近衛家第二十代。父近衛尚嗣、母後水尾天皇皇女内親王、実母瑤林院。父尚嗣が若くして没したため、後水尾院の庇護のもと、六歳で近衛家を継ぐ。近衛家熙（一六六七—一七三六）や第六代將軍徳川家宣御台の天英院熙子（一六六一—一七四二）の父。著書に『源氏物語』の注釈書『一簣抄』（全七十四冊）がある。

約七百通もの消息の特徴を言い表すことは困難ではあるけれども、おおよそ把握し得たところを以下に申し述べる。消息の差出所は、「基熙」、「悠」、「悠見」と記される。

「悠」、「悠見」は基熙の号で、「悠」は連歌の一字名としても用いられる。意識して書き分けられたものか否かは、今のところ不明である。

内容から推して、消息の多くは、基熙孫の家久（一六八七—一七三七）宛てであると思われる。もちろん、そのほかの人物に向けた消息、あるいは、誰に宛てたかを判断できない消息もある。すくなくとも、家久に対するまとまった消息群が残るのはたしかで、これは近衛基熙自筆消息の特色のひとつに数えてよいのかもしれない。

ここに紹介した消息に明記される宛所は、①大納言殿（垂相殿）、②左大将殿（左幕府殿）、③内府殿（内府公・内相府公）、④右府殿（右府公・右相府公・右丞相公）である。家久の任官時期に照らせば、

①権大納言：元禄八年（一六九七）十二月二十三日〜正

徳元年（一七一二）二月二十五日

②左大将：宝永三年（一七〇六）十一月二十五日～正徳

二年（一七二二）十二月十八日

③内大臣：正徳元年（一七一）二月二十五日～正徳五

年（一七一五）八月十二日

④右大臣：正徳五年（一七一五）八月十二日～享保七年

（一七二二）五月三日

となる。これらは、各消息が書かれた年次を絞り込む目安となろう。なお、②は①・③に兼任であるが、『基熙公記』では、左大将任官後には左大将の、内大臣昇進後は内大臣の呼称が、それぞれ一貫して用いられる。消息も同様と考えられる。

基熙は、はやくから家久に歌道の才能を見出し、和歌連歌を指導した。享保二年（一七一七）三月四日に三部抄伝授、同年十二月二十三日に伊勢源氏伝授、享保三年四月十三日に古今伝授を授けた。掲出した消息には、基熙と家久の関係を反映すると考えられるものがある。家久への源氏講釈のために、基熙は正徳二年八月九日から正徳六年閏二月五日にかけての『一簣抄』を執筆した（拙稿『一簣抄』の周縁）『国語国文』第七十五卷第十一号、平成十八年十一月）。消息（5872）は、『一簣抄』作成に必要な注釈書を届けるよう依頼したものであろう。書物の取り次ぎという形で、家久も基熙の注釈作業に関わっていたので

ある。

陽明文庫の典籍資料の大部分は歴代当主による蒐書の結果であり、基熙もその一端を担っていた。本稿でとくに書物名を明記する消息に着目したのは、消息と現存本との対照から、基熙が本の書写に関与した背景を窺いうると考えためである。

試みに、『閑塵集』を取り上げる。猪苗代兼載の自撰歌集『閑塵集』は、黒川昌亭氏によって陽明文庫蔵本（写本一冊・所蔵番号（二四五―三三））が紹介されて学界に知られた。<sup>①</sup>陽明文庫蔵本には家久筆の打付外題があり、末尾に家久筆のつぎの識語がある。

右一冊者、以法橋兼竹本令書写（正徳長富） 則一校了

享保四年臘月十五日

猪苗代兼竹（のち兼恵と改名、一六九一―一七五〇）の所持本を、家久が近衛家諸大夫の進藤長富（一六九六―一七三二）に書写させた本が、陽明文庫蔵本である。ところで、『5872』は、家久からの書状に基熙が返事を書き入れた勘返状である。ここに、『閑塵集』一冊について言及されている。家久は、消息に添えて、長富に写させた『閑塵集』を基熙に送ったのであった。この『閑塵集』は、現存の陽明文庫蔵本であろう。消息の日付は十二月四日であるのに対し、陽明文庫蔵本の識語は享保四年十二月十五日付けで

ある。つまり、家久は、基熙に目を通してもらったうえで、さきの識語を認めたのである。そもそも、『基熙公記』享保四年十一月九日条に、

午、兼竹持参兼裁詠草等二冊、近比殊勝々々、右府〔家久〕来会幸言談、移刻了、

とみえる。冊数の違いは気になるが、日付から、「兼裁詠草」は陽明文庫蔵本の親本「法橋兼竹本」とみてよいだろう。本来は兼竹が基熙のもとに持参した本を、来合わせた家久に基熙が転写を命じたと考えるべきで、消息の内容とも符合する。

〔35725〕・〔35872〕・〔35974〕・〔36020〕には、書物の形状が窺われる記述が見えて興味深い。当時の近衛家に、どのような本が存在し、どのように利用されたのか、現存本の伝来を裏付けるためにも、これら消息の検討は課題であるといえよう。

注(1)黒川昌亭氏「新出の兼載歌集「閑塵集」について―兼載伝に關する二、三の事項に及ぶ―」『連歌俳諧研究』第四十六号 昭和四十九年三月)。「閑塵集」は、陽明文庫蔵本のほか、宮内庁書陵部に同系の写本一冊が蔵される『和歌大辞典』(昭和六十一年 明治書院) 井上宗雄氏執筆「閑塵集」項)。陽明文庫蔵本は、『私家集大成』第六卷中世IV(昭和五十一年

明治書院)に翻刻されたのち、『陽明叢書国書篇第六輯 中世和歌集』(昭和五十三年 思文閣出版)に所収された。

資料の翻刻と読解は、陽明文庫文庫長名和修先生にご指導いただきました。記して深謝申し上げます。

### 〔凡例〕

財団法人陽明文庫に所蔵される近衛基熙消息のうち三十一通を翻刻する。翻刻に際しては、原本を尊重することを心がけたが、以下の方針で手を加えた。

- 一、本稿における通し番号を算用数字で示した。所蔵番号を( )内に算用数字で示した。また、原本の形状と法量を記載した。掲載は所蔵番号の順とした。
- 一、改行は原本にしたがった。返し書きは本文より二字下げとした。端裏書は、本文末尾に「(端裏)」として「」内に示した。
- 一、原則として、漢字は通行の字体に改めた。清濁は原本の通りとした。
- 一、折紙状は折表の末尾を「」で示した。
- 一、適宜、句点を施した。
- 一、虫損等で判読不可能な文字は「□」とした。

〔翻刻〕

① 「近衛基熙消息」〈19284〉折紙 三三・八×四七・〇

口状

日々嚴寒如何、

弥平安候哉、愚老

無別条候、然者、

講尺之事、明日

陳候者、可被来候哉、

且又、野槌、聊

勘度事候間、可

給之候、尤、不急

事候条、以序

可給之候、諸般

可在面談、不詳々々

仲冬廿二鳥

悠見

内相府公

口状

② 「近衛基熙消息」〈19286〉折紙 三三・〇×四三・二

一、此儀式十冊

修理二外題ヲ

かゝせられ候へく候、箱二ハ

不及候、

一、先日之和漢写

返入候、

一、夕飯後、暫時

可来給候、講談

之義二付、少申

合度事候、只今ハ

一種給候、則令

賞味候也、

廿九日

内府殿 基熙

③ 「近衛基熙消息」〈19289〉折紙 三三・三×四六・三

残暑不堪忍

迷惑候、其辺

無異事候哉、然者、

類要集、久々令

抑留候、今日返入候、定而、

其方可有要事

思給候事、且又、先日

返進候著聞集、所々

先姥被加御筆候、

大切之本候、又、昨日

給候清少納言枕草子

本源自性院殿外題

同御筆候、可有披

藏候、心事可

在面談候、不具候かしく

七五

悠見

右府公

口状

④ 「近衛基熙消息」(1943)切紙 一六・七×四〇・〇

中御門、只今被帰候、可来給候、

一、百人一首の清濁書たる本

其方二有之候哉、有候ハ、可有

持参候、

一、一門へ用事候而、飛脚遣候、

用ハなく候哉、かしく

廿日

(端裏)「封」内府殿 基熙

⑤ 「近衛基熙消息」(1943)切紙 一七・〇×四〇・〇

例之失念無面目候、

一、雨中吟之中、おほやかはらの

哥ハ、いはひつゝよく候へく候、

富へ可被申候、

一、未来記、雨中吟も

次第ハ色く有之候、不審

有ましく候、則、此本を

そなたへ進候まゝ、

さしをかれ候へく候、かしく

(封)内府公 悠

⑥ 「近衛基熙消息」(1944)切紙 一七・〇×四〇・〇

詠哥大概抄御抄。其方二有候哉と、

後日、暫、見申度候間、可給候

事候、晚來可申分、かしく

十一月六日

(端裏)「(封)内府殿 基熙」

⑦「近衛基熙消息」(19432) 堅文 三三・〇×四四・二

残暑と申候はん哉、于今暑氣難堪候、乍去自昨夜、

少散氣候、弥、安全候哉、

一、自所司相尋候書付、再、自此方書付遣候趣如此可然候哉と

思給候、若出来候へ、無憚被書候而而給候、此分にて宜候へ、

被写候而、早々可返給候、

一、著聞集見終候間、返入候、又、清少納言枕草子見申

度候間、可給候、

一、御詠共之事、暑氣故、于今、遅引候、

一、此筆、其方有之候へ、十管許可給之候、

一、明日明後日来給候様にと思給候、以上

(端裏)「(緘)右府公 悠見」

⑧「近衛基熙消息」(19442) 堅文 一七・〇×三六・〇

昨夜雷鳴、今日湿氣、尤

不正明、雖然平穩珍々

重々、然者此一冊返入、

且又、明月記目錄、聊

可勘事有之候条、可給之候、

先以今朝使申含候通、為

差要事無之候者、不可來給候、

一兩日中可在面談候也、不具く

九月十三日

(端裏)「(封)右丞相公 悠見」

⑨「近衛基熙消息」(19444) 堅文 三三・〇×四六・二

返々、校合定日、追而、可申候也、

書札、并、職原鈔一部

給之、先以、落掌了、且又、

校合之事、九日十一日之間、

可始候、但、猶、定日從是

可令案内候、余事、可

在面談、不具く

八月七日

(封)回章 悠見

⑩ 「近衛基熙消息」〈1949〉 堅文 二七・〇×三六・〇

追申条其方に返申候哉、如何く、

天顔得快晴、悦思給候、其辺

弥平穩候由、珍重候、此方無別

般候、然者、明月記引勘候条、

返入候、但、其中、トカノ雄明恵坊

之事有之候間、其一条、被書

抜候而、可給候、又、例之淺黄表紙

一冊、返入候也、不詳く

九月廿二日

(封) 右府公 悠見

⑪ 「近衛基熙消息」〈1948〉 切紙 一四・二×五四・五

昨日来給、喜々

悦々、然者、草根集

二冊返入、委事

明春在面話、不具く

臘晦

(封) 右府公 悠見

⑫ 「近衛基熙消息」〈19509〉 堅文 三二・八×四七・〇

追、兼郁月次連哥懷紙、落手候也、

先刻申候三代集、并、

貫之、公忠兩集、給

之候、暫抑留候、先以、

過刻来給候、悦入候、

猶、期面談候也、

四月一日

回章 悠見

⑬ 「近衛基熙消息」〈19514〉 折紙 三三・〇×四一・〇

(口) 口状

□朝来談悦入了、

一、先日、被来一覽候絵一、

返入候、其中、時代不同

之中、真名哥、并、宣命

書等、聊、用事候間、仰長富、

書写され候て、可給候、少も不

急事候条、四、五日中午、可給

之候事、

一、絵共、少々破損候、早可

被加修補之事

□ 昨朝、見申候御詠一々殊勝、令悦目候、猶又、加再

□ □ 可申候左右候事、

〔一〕<sup>二</sup> 統世繼見終候間、令返

入候、古今著聞集可給之事、

一、一簣抄中須磨卷、自

天英院所望之由、申來候、

其方便次第、自其方

直二可被遣候事、

今朝も如申、旧事大切

之事共候、此比、水鏡以下

一覽候、老後、重而、加感慨

而已候、只、每事末世之躰、

更無是非思給計候、猶

心事、近日期面話、已上

六十九

悠見

右府公

令落掌、只今、此方

用事候故、不能

委細候、心事期

面談而已候、不具く

八月十九日

(封) 回章 悠見

⑭ 「近衛基熙消息」(35690) 折紙 三三・三×四五・七

只今、可伝頼母を

忘却候キ、百人

一首本無之候、

右府方二有之候者、

可給候、又、右府二

無之候者、其方

之本二而も可給候、

不自由之談儀者

おかしく候、本少も

いそく事にてハなく候、

明日、可有隨身候、

心事明日可在

面談候、不宜

八日 悠

⑭ 「近衛基熙消息」(19515) 堅文 三三・〇×四六・二  
大永御記給之

巫相殿

⑩ 「近衛基熙消息」(3569) 竪文 三三・五×四六・二

追而申、校合之事、先十日比可

相催候、未定候、猶、九日可令案内候也、

残暑未去、人々難義、

此事候歟、然者、愚問賢注、

暫書写終功候間、校合

之事、兼申通候間、閑

暇之時分、一覽候、尤

大切之事共候、且又、所々僻

字等書残候、能々可被加吟味候、

心事可在面談候、不具〳〵

八日

(封) 内府公 悠見

⑪ 「近衛基熙消息」(35725) 切紙 二六・七×三九・七

三部抄一冊、賀和哥写等

給之候、落掌候、光源氏ハ

一此浅黄表紙本ニテハ、

無之候、書本之四半本ニ而、

外題無之檐子にて候間、

とりかへられて可給候也、

再報

巫相殿 悠

(端裏)「(封) 悠」

⑫ 「近衛基熙消息」(35775) 竪文 三三・〇×四五・三

過刻來給之時示候

千五百番歌合可賜之候、

且又、此目六之通、閑白手

透之時、可被伝候事候、

期面談候也、不具々々

中春初九

(封) 左幕府殿 悠見

⑬ 「近衛基熙消息」(35789) 切紙 二七・〇×三六・〇

昨日、乍早速面談

本望候、然者、愚老

書候古今集二部

之内一本、可給之候、

心事期對話候也、

正月十八日

⑳ 「近衛基熙消息」(35799) 堅文 一七・〇×四〇・〇

四帖敷の机の上ニ、昨日校合候

後撰の下巻候間、いそぎ

御こしあるへく候、若なく候者、

其机の上のぶんこうニあるへく候、

十五日

(封) 大納言殿 基熙

㉑ 「基熙勘返家久書状」(35834) 折紙 三三・〇×四六・〇

※コシツクは基熙筆

追啓 前撰政風氣快然候、

是又以次手言上候也、

今日者、得快晴候、乍然、

寒氣甚候、御安全被

為渡御座候哉、承度

令存候、抑、閑塵集

為長富令書候、漸、清書、一段驚目候、暫、熟覽後可返入候、

校合功終了、先、入御

覽候、且又、先日者、令

参候へとも、無其儀、令退出候、

月次愚詠、被加御添削

畏令存候、長富詠草、昨夜、即、付墨候、

漸加□案候、別紙書之

備高覽候、今日可令

出頭存候処、彼是用事

依之延引候、尚、一兩日

中、令参思召之儀候ハ、

可承候、以此旨、宜令

沙汰候也、頓首々々

十二月四日

口状 返答 家久

㉒ 「近衛基熙消息」(35835) 切紙 一九・五×六一・五

追申、一巡哥仙にて候間、

其心得あるべく候也、

一、伊物外題書候、奥書

同染筆候間、進候、

一、詠草付墨候、不逢恋、

如何様にも可添削候

へとも、先返候、今少

可有思案哉と思給候、

一、一巡四句目、興恒、次

執筆代時真朝臣ニ

申付候、則、書付候次可

有候、愚案候、

一、明日者、定而、可有雨

天候条、可令校合候、

一、左相府へ、昨晚、対

面本懐候、無事之由

珍重候、然者、庭ニ、ミツマタ

花サキ候ハ、一朶可給由、

可被伝候也、

十九日

(端裏)「丑相殿 悠」

②③「近衛基熙消息」(35872) 卷紙 一六・〇×五七・二  
残暑無治術、

困窮至極候、然者、

源氏物語鈔、如

目六可借給候、心

事可在面談、不宜々々

八九

河海抄 第一

花鳥余情 同

休聞抄 同

右内、休聞ハ浅黄表

紙ニテ、無外題本ト

覚候、三冊トモニ、一冊

ツ、可給候也、

(端裏)「封」内府公 悠

②④「近衛基熙消息」(35925) 卷紙 一六・四×一〇五・八

過刻来給

申承悦入候、

然者、寛永

度出候題、

慥有之候様

思出候へとも、

後水尾院

御製、一向忘

却候、早々、

御詠草、并、

黄葉集等、

可被考候、

且又、今晚、可

参思給候処、

寒氣難出

頭候間、延引候、

心事、猶

可在面談候、不宜々々

孟陽仲三 悠見

内相府公

(端裏)「口状」

㊦ 「近衛基熙消息」(3927) 卷紙 一六・一×四二・八

過刻承候

紹運録、只今、

漸見出候条、進候旨、

可被申前撰政候、

又、補任四冊、所

用相濟候間、返入候、

又、此一封、可被伝

前撰政殿へ候也、穴賢く

九月十二日

(端裏)「内府公 悠見」

㊦ 「近衛基熙消息」(3932) 卷紙 一六・〇×八七・五

追而、定家卿哥之事、

早々給、悦入候也、

来書、并、令約候

撰集抄、無失念

給之、悦入候、且又、

本草綱目、今少、

用事候間、近日、可

返入候、先々、不

珍大雨、老人難

儀之至候、乍去、

昨日、行蓼青、

散鬱懷候了、

世間、松茸

盛之躰候、少々被

思起、被見物候者、

可然養性候と存候、

事々期面

談外

無他候也、不具々々

番附八日

内府公返報

㉗ 「近衛基熙消息」(35971) 卷紙 一六・〇×八四・〇

其辺何等之事候哉、

昨夜以来、得涼氣、

散鬱懷候、

一、大永御記一冊、

終功候條、進之候、又、

一冊、可給之候歟、

一、先日言談候、六家

集之中、壬二、令

一覽候処、加意味候、

又、拾遺愚草、

披閱、誠、此道

中御興有、可有比

類候歟、感歎々々、

其中、藤河百首、

同為家卿之詠哥、

父子風躰、雖為

各別、意味深長、

更令悦目候、

一、一巡之事、兼郁

申趣候事、聊、有之候、

事々可在面談、不具々々

七月廿八日 悠見

右相府公

(端裏)「口状」

㉘ 「近衛基熙消息」(35974) 卷紙 一六・〇×九一・〇

覚

一、伊勢物語五福本 一冊

一、同御抄 愚意書入 有 愚意書入 二冊

一、源氏物語 愚意書中本タシ スノ上ノ題ニツ

一、源氏物語 一箱

此本古本の浅黄表

紙にて候、

右之分、箱ソコネ申

サヌヤウニ念ヲ入ラレ

早ク可給候、

五月十六日 悠見

左大将殿

以上

被相尋に候、悦入候、

口中痛腫、弥、快

然候故、不起候、

明日比、可出候哉、猶、

見計天氣候事候、

今日、以序、可来

給歟、但、此方、閑

東書状等、可認事候間、

不及来給候也、

四月一日 悠見

内府公

〔端裏〕〔口状〕

㊤ 「近衛基熙消息」(3597) 卷紙 一六・五×七一・〇

追、昨日給候古文真宝

此方有之候條、返入候也、

今日、慶賀珍々

重々、定而、可為

参朝候、抑、一巡

自頼庸為持越候、

端尤候条、可被書

付候、且又、今日、可

出行歟之由、今朝、

㊦ 「近衛基熙消息」(3602) 卷紙 一六・二×四五・〇

追而申、旧記等、

不審等有之候者、可

被相尋候、愚存候者、可

示聞候也、

左府所劳弥快候由、

珍重々々、然者、今日、各

入来之由、昨日承了、

(端裏)「封」左幕府殿 悠見」

③「近衛基熙消息」(36020) 卷紙 一六・三×六〇・〇

其辺何等事候哉、

今日之祝義、先以、

目出度候歟、然者、

三十六人家集、

古筆之臨写之本、

タメヌリノ擔子ニ、泥

ニテ三十六人家集ト

書付有之候一函、自

後西院拝領候キ、

聊、見合度有之候、

今日、例之風、猶烈、

弥、平安候哉、此方

無別条候也、

三廿八 悠見

内相府公

(端裏)「封」内相府公 悠見」

弥、会集候哉、且又、

中右記、玉葉等、被

引見候哉、兼仍朝臣

被来候哉、彼是、承

度候、

一、此方、僕従、少中

所劳者多候間、従

今夜、宿之事、可相

止之候、若、相違事

有之候者、早々、可被

告知候、

一、来廿九日、宣下已後、

如每度、肴等進

献可有之候歟、内々、

被聞合候而、用意

尤候、

一、宣下以下所作、人々

被尋衆中有之候者、

○被来候而、可被相尋候、

右之通候条、被得其

意尤候、心事可在

面談候也、

(かわさき さちこ・立命館大学非常勤講師)